

おおひらひがししょうがっこう

大平東小学校



あんしょうしぶんしゅう

暗唱詩文集

何度も音読したり暗唱したりすることで豊かな「ことば」を育みます。

前	名

すべて合格した人には賞状を授与します。

- | | | | | | | | |
|---|---|--|--|--|---|---|---|
| ⑧ 論語
ろんご
<input type="checkbox"/> | ⑦ 方丈記
ほうじょうき
<input type="checkbox"/> | ⑥ 春暁
しゅんぎよう
<input type="checkbox"/> | ⑤ 平家物語
へいけものがたり
<input type="checkbox"/> | ④ 枕草子
まくらのそうし
<input type="checkbox"/> | ③ 春の七草
はる ななくさ
<input type="checkbox"/> | ② 月の異名
つき いみよう
<input type="checkbox"/> | ① 十二支
じゅうにし
<input type="checkbox"/> |
| ⑩ 徒然草
つれづれぐさ
<input type="checkbox"/> | ⑨ 竹取物語
たけとりものがたり
<input type="checkbox"/> | ⑪ 偶成
ぐうせい
<input type="checkbox"/> | ⑫ 初恋
はつこい
<input type="checkbox"/> | ⑬ 黄金虫
こがねむし
<input type="checkbox"/> | ⑭ 山のあなた
やま
<input type="checkbox"/> | ⑮ 小景異情
しょうけいいじよう
<input type="checkbox"/> | ⑯ おくの細道
ほそみち
<input type="checkbox"/> |

じゅんばん かんけい き い しぶん おんどく
順番に関係なく、気に入った詩文から音読したり

あんしょう
暗唱したりしましょう。

あんしょう ごうかく
スラスラと暗唱できたら合格です。

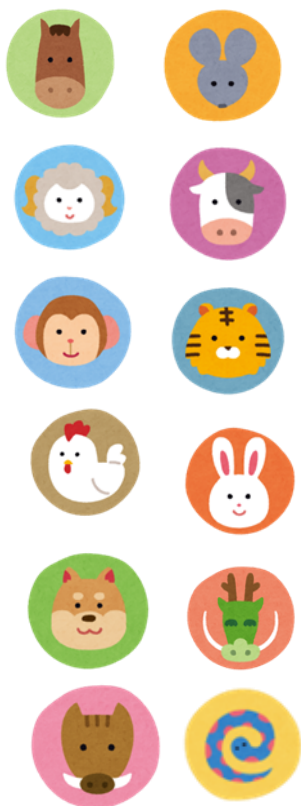
① 基礎

十二支

じゅうにし
十二支

子 ね
丑 うし
寅 とら
卯 う
辰 たつ
巳 み

午 うま
未 ひつじ
申 さる
酉 とり
戌 いぬ
亥 い



子 (ネ) 鼠 (ねずみ)
丑 (ウシ) 牛 (うし)
寅 (トラ) 虎 (とら)
卯 (ウ) 兔 (うさぎ)
辰 (タツ) 龍 (たつ)
巳 (ミ) 蛇 (へび)
午 (ウマ) 馬 (うま)
未 (ヒツジ) 羊 (ひつじ)
申 (サル) 猿 (さる)
酉 (トリ) 鶏 (とり)
戌 (イヌ) 犬 (いぬ)
亥 (イ) 猪 (いのしし)

合格印

② 基礎 月の異名

月の異名
つき いみよう

睦月
むつき

如月
きさらぎ

弥生
やよい

卯月
うつき

皐月
さつき

水無月
みなづき

文月
ふみづき

葉月
はづき

長月
ながつき

神無月
かななづき

霜月
しもつき

師走
しわす

月の異名・・・昔の月の言い方

睦月・・・一月
如月・・・二月
弥生・・・三月
卯月・・・四月

皐月・・・五月
水無月・・・六月
文月・・・七月
葉月・・・八月

長月・・・九月
神無月・・・十月
霜月・・・十一月
師走・・・十二月

合格印

③ 基礎 春の七草

はる はる ななくさ

春の七草

せり なずな

ごぎょう はこべら

ほとけのざ

すずな すずしろ

これぞ七草

ななくさ



七草がゆ



せり



なずな



ごぎょう
(ハハコグサ)



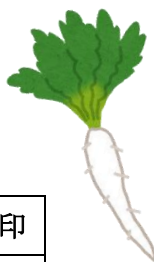
はこべら
(ハコベ)



ほとけのざ



すずな
(カブ)



すずしろ
(ダイコン)

合格印

春の七草とは、春の早いころに見られる七種類の植物のこと。
しゅくしゅく
 一月七日には、これら七種類の植物をおかゆに入れた「七草がゆ」を食(た)べて、一年間の健康(けんこう)を祈(いの)ります。

④ 古文 枕草子 清少納言

まくらのそうし

せいしょうなごん

枕草子

清少納言

はる

よ よ しろ

やま わ

春は、あけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは、

むらさき

くも

ほそ

すこしあかりて、紫だちたる雲の、細くたなびきたる。

なつ よる つき

やみ

お

夏は夜。月のころはさらなり、闇もなほ、

ほたる

おお

と

い

ひと

ふた

螢の多く飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、

ゆ

お

ほのかにうちひかりて行くもをかし。

あめ

ふ

お

雨など降るもをかし。

合格印

春は夜明けが良い。

だんだん白んでゆく

やまぎわ

山際が、少し明るくな

って、紫がかった雲

むらさき

が細くなびいているの

が良い。

夏は夜が良い。月の

あるころは言うまでも

ない。闇もやはり螢が

やみ

ほたる

たくさん飛び交ってい

るのが良い。また、た

だ、一つ二つなど、かす

かに光って飛んでいく

のも面白い。雨などが

おもしろ

降るのも面白い。

⑤ 古文 平家物語

へいけものがたり

平家物語

さくしやふしやう

作者不詳（だれが書いたか分からない）

ぎおんしょうじゃ

かね

こえ

しよぎやうむじやう

ひび

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。

しやらそうじゆ

はな

いろ

じやうしやひっすい

ことわり

わ

娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。

ひと ひさ

ただはる

よ

ゆめ

おごれる人も久しからず、唯春の夜の夢のごとし。

もの つい

ひとえ

かぜ

まえ

ちり

おな

たけき者も遂にはほろびぬ、偏に風の前の塵に同じ。

合格印

祇園精舎の鐘の音には、諸行無常すなわちこの世のすべてのことは絶えず変化していくものだという響きがある。

娑羅双樹の花の色は、どんなに勢いが盛んな者も必ず衰えるものであるという道理をあらわしている。

世に栄え得意になっている者も、その栄えはずっとは続かず、春の夜の夢のようにはないものである。

勢い盛んではげしい者も、結局は滅び去り、まるで風に吹き飛ばされる塵と同じようである。

⑥ 漢文 春曉 孟浩然

しゅんぎよう もうこうねん

春 曉 孟浩然

しゅんみん あかつき おぼ

春 眠 曉 を 覚 え ず

しよしよ ていちよう き

処 処 に 啼 鳥 を 聞 く

やらい ふうう こえ

夜 来 風 雨 の 声

はな お し たしょう

花 落 つ る こ と 知 ん ぬ 多 少 ぞ

合 格 印

はる ねむ あさ き 春の眠りは朝が来たことに気付かないほど心地よく、寝過ねすごしてしまおう。

春、あたたかな蒲団ふとんの中でふと目を覚さました。

もう部屋へやの中は、明るい日差ひざしでいっぱいだ。

「ああ、気持ちいい。もう少しこのまま、こうして横よこになつていたいなあ・・・」

耳には、鳥のさえずる声が近く、遠く響ひびいてくる。

きつと外は、緑みに満みちあふれている。

「そう言えば昨日の夜は、ものすごい雨と風だったつけ・・・通り過ぎてしまえば、まるでうそみたいだけど」

うとうとしながら考えているうちに、ふとはつとした。

「そう言えば、嵐あらしで、あんなに咲いていた花も散つてしまったのかな。どれくらいちったのかな」

そう思いながら、また眠ねむりに引き込まれていく。季節はいつしか、春の終わり。そして、こんなに気持ちいい眠り、他にない。

⑦ 古文 方丈記 鴨長明

ほうじょうき

かもものちようめい

方丈記

鴨長明

ゆく河の流れは絶えずして、

かわ なが た

しかも、もとの水にあらず。

みず

淀みに浮ぶうたかたは、

よど うか

かつ消えかつ結びて、

き むす

久しくとゞまりたる例なし。

ひさ ど ためし

世中にある人と栖と、またかくのごとし。

よのなか ひと すみか

合格印

川の水は絶えることなく流れて

なが

元の水のままではない、淀みに浮か

う

ぶ水の泡も消えたり結んだり、同

あわ

き

むす

じ状態にはない。世の人と住まい

よ

す

もこのようなものだ。

⑧

漢文

論語

孔子

ろんご

こうし

論語

孔子

しい

子曰わく、

まな

とき

こ

なら

ま

よろこ

学びて時に之れを習う、亦た説ばしからず乎。

ともあ

えんぼう

き

ま

たの

や

朋有り遠方より来たる、亦た樂しからず乎。

ひとし

いか

ま

くんし

や

人知らずして慍らず、亦た君子ならず乎。

合格印

中国では「子」は先生という意味
なので、孔子は孔先生ということ。

孔先生は言う。

繰り返し学び、

友達と学問について話し、

人から評価されずとも怒らないの
が学ぶ者の姿だ。

⑨ 竹取物語

たけとりものがたり

竹取物語

作者不詳（だれが書いたか分からない）

いま おかし たけとり

おきな

うもの

のやま

たけ と

今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。野山にまじりて竹を取りつ

ず

つかい

な

みやつこ

ん い

つ、よろづのことに使ひけり。名をば、さぬきの造となむいひける。

たけ

なか

ひか

たけ

んひとすじ

あや

よ

み

その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。怪しがりて、寄りて見

つつ

なかひか

み

さんずん

ひと

るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつ

しゅう

い

くしうてゐたり。

今ほもう昔のことになるが、竹取の翁と言う者がいた。野や山に分け入って竹を取り竹を取りしては、いろいろな物を作るのに使っていた。名をさぬきの造といった。（いつも取る）竹の中に、根元が光る竹が一本あった。不思議に思って近寄ってみると、筒の中が光っている。それを見ると、三寸ばかりの人が、とてもかわいらしい姿で座っている。

寸・・・約3.03センチメートル

合格印

⑩

徒然草

つれづれぐさ

よしだけんこう

徒然草

吉田兼好

つれづれなるまゝに、日暮らし、硯におかひて、心にうつりゆくよしな
し事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。

これは、暇にまかせて一日中机の前にいるときに心に浮かんだことを適当に書きとめておいたもの
である。したがって、実にくだらない馬鹿馬鹿しいものである。

合格印

⑪ 漢文

偶成

朱熹

ぐうせい

しゆき

偶成

朱熹

しょうねんお

やす

がくな

がた

少年老い易く学成り難し

いっすん

こういんかろ

一寸の光陰軽んずべからず

いま

さこ

ちとうしゆんそう

ゆめ

未だ覚めず池塘春草の夢

かいぜん

ごよう

しゆうせい

階前の梧葉すでに秋声

年はすぐにとつてしまふも

のだが、学問はなかなか成しと

げることができない。だから、

わずかな時間でもむだにして

はならない。池のそばに芽を出

した春の草が夢を見ているう

ちに、いつのまにか庭先の

青桐の葉には、秋風がしのびよ

つている。そのように、月日は

あつというまに過ぎ去つてし

まうものである。

合格印

⑫ 現代文

初恋

島崎藤村

はっこい

しまぎとうそん

まだあげ初めし前髪まへがみの

りんご

み

林檎のもとに見えしとき

まえ

はなぐし

前にさしたる花櫛はなぐしの

はな

きみ

おもい

花ある君と思ひけり

しろ

て

やさしく白き手をのべて

りんご

え

林檎をわれにあたへしは

うすくない

あき

み

薄紅の秋の実に

ひと

いそ

人こひ初めしはじめなり

合格印

少女しょうじょとの清きよらかで初々ういういしい初恋はっこいを七五

調てうのリズムでうたつたもの。

少女との出会い、恋めばの芽生え、恋の

成就ていせう、回想かいそうの四部構成しぶこうせいになっている。

まだあげ初めし前髪まへがみの・・・お下げ髪を日

本髪ゆに結ゆいまじめた、その髪が。

林檎のもと・・・林檎の木の下に。

花櫛はなぐし・・・造花ぞうかでかざった櫛くし。

花ある君・・・花のように美しい君。

あたえしは・・・与えたことは。

人こひ初めし・・・人をはじめて恋しく思
った。

わがこころなきためいきの

かみ け

その髪の毛にかかるとき

こい さかずき

たのしき恋の 盃を

きみ なさけ く

君が情に酌みしかな

りんごばたけ こ した

林檎 畠の樹の下に

ず ほそみち

おのづからなる細道は

た ふ

誰が踏みそめしかたみぞと

とい もう い

問ひたまふこそこひしけれ

合格印

こころなきためいきの・・・思い余

つてもらす恋のためいき

おのづからなる・・・自然にできた。

かたみ・・・記念

問ひたまふ・・・お聞きになる。

⑬

現代文

黄金虫

野口雨情

こがねむし

黄金虫

のぐちうじょう

野口雨情

こがねむし

黄金虫は、

かねも

金持ちだ。

かねぐらた

金蔵建てた、

くらた

蔵建てた。

あめや みずあめ

飴屋で水飴、

か き

買って来た。

こがねむし

黄金虫は、

かねも

金持ちだ。

かねぐらた

金蔵建てた、

くらた

蔵建てた

こども みずあめ

子供に水飴、

なめさせた。



水あめ



コガネムシ



蔵

合格印

⑭

現代文

山のあなた

カールリブツセ

やま

山のあなた

カールリブツセ

うえだ

びん

やく

上田 敏 訳

やま

山のあなたの空遠く

そらとお

さいわい

す

ひと

う

「幸」住むと人のいふ。

ああ

噫、われひとと尋めゆきて、

と

なみだ

涙さしぐみかへりきぬ。

え

やま

山のあなたになほ遠く

おとお

さいわい

す

ひと

う

「幸」住むと人のいふ。

山のかなたの果てしない遠くに、

しあわ

幸せがあると人が言う。

私もみんなと一緒に(いっしょ)行つて、その幸せをさがし求め続けてきた。でも、幸せは見つからなかった。そして、涙のあふれた目のまま帰ってきた。

それはとても悲しいことだったけれど、でも幸せがないというわけではない。山のかなた遠く遠く向こうに幸せがあると人が言う。

どこかに――、どこかに、きっとあるんだよ。

合格印

⑮

現代文

小景異情

室生犀星

しょうけいいじょう

小景異情

むろうさいせい

室生犀星

とお

ふるさとは遠き^{とお}にありて思ふもの^{おも}

かな

そして悲しくうたふもの^う

よしや

いど

かたい

うらぶれて異土の乞食^{いど}となるとても

かえ

帰るところにあるまじや

ふるさと

故郷とは、遠くにいて思い出すものである。

そして悲しくうたうものである。

たとえ、

落ちぶれて、故郷^{ふるさと}ではない土地^{とち}で乞食^{こじき}にな

ったとしても、

(決して) 帰るところではないだろう。

一人で都の夕暮^{ゆうぐ}れに、故郷を思い出しなが

なみだ

ら涙ぐむ。

そんな気持ちで、

遠い都に帰ろう。

遠い都に帰ろう。

合格印

みやこ

う

ひとり都のゆふぐれに

いなみだ

ふるさとおもひ涙ぐむ

そのころもて

とお

え

遠きみやこにかへらばや

とお

え

遠きみやこにかへらばや

合格印

①6

古文

おくの細道

松尾芭蕉

おくの細道

ほそみち

松尾芭蕉

まつおばしやう

つきひ

はくたい

かかく

ゆき

うとし

またたびびとなり

月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。

ふね

うえ

しょうがい

舟の上に生涯をうかべ、

うま

くち

え

お

う

もの

馬の口とらへて老いをむかふる物は、

ひびたび

たび

すみか

日々旅にして、旅を栖とす。

こじん

おお

たび

し

古人も多く旅に死せるあり。

月日というものは、永遠に旅を続ける

たびびと

旅人のようなものであり、来ては去り、

去つては来る年もまた同じように旅人

である。船頭として船の上に生涯をう

せんてう

しょうがい

かべ、馬子として馬のくつわを引いて老

まご

お

いを迎える者は、毎日旅をして旅をすみ

むか

かとしているようなものである。昔の人

のなかには、旅の途中で命を落とす人が
多くいる。

合格印

あんしょうしぶんしゅう
「暗唱詩文集2」の目次
もくじ

①⑦ 雪 ゆき ☐

①⑧ 古今和歌集より ☐

①⑨ 春望 しゅんぼう ☐

②⑦ 弁天娘女男白波 べんてんむすめおのしらなみ ☐

②① 曾根崎心中 そねざきしんじゅう ☐

②② 松尾芭蕉の俳句 まつおばしょう はいく ☐

②③ 寿限無 じゅげむ ☐

②④ 石川啄木「一握の砂」 いしかわたくぼく いちあく すな ☐

②⑤ 学問のすゝめ がくもん す ☐

②⑥ 吾輩は猫である わがはい ねこ ☐

②⑦ 坊ちゃん・草枕 ぼっ くさまくら ☐

②⑧ 蜘蛛の糸・鼻・羅生門 くも いと はな らしやうもん ☐

②⑨ 走れメロス はし ☐

③⑦ 静夜思 せいやし ☐